

「勇気への歌」

詩編 27編

挽地茂男

2020.6.14. 日本基督教団千歳丘教会

- 序論1
- 1 詩編から神の言葉を聞く
 - 2 ユダヤ人の金言
「金を失うと人間は、人生の半分を失う。しかし、
勇気を失うと、人間はすべてを失う。」
 - 3 水戸黄門の主題歌 「人生勇気が必要だ…」
TBSテレビ「月曜ゴールデン特別企画
「水戸黄門スペシャル」
2015年6月29日(月)より9:00放送
 - 4 勇気＝生きてゆくことの底力
 - 5 人生において勇気を失う⇒勇気はどこから来るか

さて今日の礼拝では、旧約聖書の詩編の中から、ともに神さまの言葉を聞きたいと存じます。この詩編27編のテーマは14節の「主を待ち望め／雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め」という言葉にありますように「勇気」の問題であります。勇気はニーチェやリルケなどの哲学や文学においても、さらには神学においても大切な問題として論じられます。P. ティリッヒという神学者が *Courage to Be* (『存在への勇気』) というとても有名な本を残しております。またユダヤ人の金言に、こういう言葉があります。「金を失うと人間は、人生の半分を失う。しかし、勇気を失うと、人間はすべてを失う。」テレビドラマ水戸黄門—時折スペシャル番組として放映されていますが、その—

主題歌の出だしは「人生、勇気が必要だ」です。人に言われるまでもなく「人生に勇気は必要」なのです。

しかし勇気は単なる空元気や、勇ましい勇猛心や、外面的な強さではありません。それは



魂の奥深くに住む生きることへの力、生きていく底力なのです。それは、人生のさまざまな不安や恐れ、失望、落胆、絶望、挫折、孤独、悲しみを乗り越える力なのです。人生の途上においてわたしたちは時として勇気を失います。その時、勇気はどこからやって来るのでしょうか。

- 序論2
- 1 詩編＝信仰の詩／宗教詩
 - 2 詩の構成要素
①経験——作者の直接的な経験
②イメージ——作者の経験に関わるさまざまなイメージ
③心情——気分、感情、思想、信仰・宗教
 - 3 これらが一つに織りなされて詩が出来上がる

さきほど読みました詩編の27編は、人生の勇気ということについて、いくつかの大切な示唆を与えてくれます。これはご存じの通り旧約聖書の詩編の中におされめられた信仰の詩、また実際に、歌として使われていた信仰の歌でもあったということが分かっております。「詩」を構成するものは、

三つのもの、①経験と②イメージと③心情と言います。すなわち①経験とは、詩を作る人の経験——つまり作者の直接的な経験が詩に反映してくるのです。②イメージ——つまりその作者の経験に関わるさまざまなイメージが使われます。そして、③心情——作者の持つその時の心の状態、つまり気分、感情、思想、信仰・宗教などなどが盛り込まれてきます。これらを構成要素として織りなされて詩が出来上がってくると言います。

序論3 1 詩編27編＝夜回りの歌(神殿警備をする)
2 夜回りと詩27編
①経験——恐怖
②イメージ——暗黒、光、朝
③心の状態——勇気

今日一緒に読みます詩編27編は、ある高名な詩編の研究者〔モーヴィンケル〕に拠りますと、分類上は「夜回りの歌」に分類されるといわれています。つまり「夜回り」というのは、その当時、エルサレムの神殿の警備をしていた人たちで、彼らが詠んだ歌、あるいは彼らが夜回りをしながら代々に渡って歌い続けた歌とも言われております。ですから、この詩編27編には「夜回り」に関連する、経験やイメージや心情が随所に見られます。今日のように明りを当



然のこととする夜とはちがう、真っ暗な夜中、自分たちの信仰の砦であるエルサレムの神殿を寝ずの番をしていた警備の人たちが詠った歌だろうといわれています。

詩というものは、詠んだその人の背景が非常にはっきりと出てくるものです。この夜回りの歌にもそういう背景が非常によく表れています。おそらく、何も見えない深く遠い暗闇の中から聞こえてくる野獣の遠吠えの不気味さ、暗闇にひそむ敵の脅威を意識しながら、心を暖める言葉のひとかけらもない状況の中で、夜回りはエルサレムの神殿を見守っていました。そして、夜が明けて朝日が昇って来るまで、神殿を守りながら朝を待っていた、その夜回りたちが歌った歌とされています。

序論4 1 1～3節
2 4～6節
3 7～12節
4 結論部13～14節(総括——全体のまとめ)

この詩は大きく四つくらいに分

けられます。

本論1 一つの源泉
1 恐怖(の経験) v1 私は誰を恐れよう
私は誰の前に戦くことがあろうか
v3 わたしの心は恐れない
2 戦い(の経験) v2 さいなむ者、敵
v3 陣、戦い
「彼らが……しても」
(どんな悪い状況におかれることがあっても)
3 v. 3 「わたしには確信がある」
(口語訳「みずからたのむところがある」)
v. 1 主は光、救い、命の砦
詩人の心は、しっかりと足をおろすところを持っている。
彼には帰って行くことのできる場所がある。
いかなる状況にもゆるがない、人生の力、勇気の源

その最初の1～3節の部分で、その夜廻りがこのように歌います。『主はわたしの光、わたしの救い、わたしはだれを恐れよう。』この部分には、恐れという言葉とそれに類する表現がたくさん出て参ります。彼は恐れを経験した人であります。1節で彼は「私は誰を恐れよう」また「私は誰の前におののくことがあろうか」といいます。また3節では「わたしの心は恐れない」ともいいます。彼は恐れを経験したことがないからこういうのではありません。彼は恐れ(恐怖)を経験した人なのです。したからこそ、それを乗り越えたからこそ、こう歌うのです。そして彼は、また、戦いを経験した人のようでもあります。2節には「さいなむ者」や「敵」といった表現や、3節には「陣」や「戦い」

といった表現が出てまいります。そして同じ3節には「彼らが……しても」(彼らがわたしに対して陣を敷いても／わたしに向かって戦いを挑んで来ても)と「彼らが……しても」を繰り返して、(どんな悪い状況におかれることがあっても)「わたしの心は恐れない」(3節)と語ります。それはなぜでしょうか？彼はなぜ恐れないのでしょうか？それは同じく3節「わたしには確信がある」と語るように、彼にある確信があるからです。新共同訳聖書の一つ前の口語訳聖書では、ここを「みずからたのむところがある」と訳しております。彼にはより頼むところ、信頼することのできるもの、確信があるのです。それはつまり1節で彼が述べたように、彼にとって主が暗黒の中



の「光」であり「救い」であり、彼の「命の砦」だからです。聖書では頻繁に、光が救いのイメージ、神のイメージとして語られます。この詩編も、闇の中にひかる光にたとえて語っています。『主はわたしの光、わたしの救い、わたしはだれを恐れよう。』闇の中に立つ彼の足を堅く立たせる勇気の源泉は、彼の信じる神＜主＞にあります。そして闇について輝く光はたとえ小さな光であろうとも、彼の人生の力、勇気の根源は、その光にあります。それは、自分がいつも帰ってくることのできる場所、いかなる状況にも揺るがない人生の力、勇気の源泉なのです。彼には一つの源泉があります。これによって、彼は立っています。慄きや敵への恐れの中で立っているのです。

本論2 一つの願い

- 1 主の麗しさを見る
非論理⇒この世の価値観では割り切れない感動
⇒礼拝者の姿
- 2 魂の奥の間＝v. 4主の家、宮
v. 5仮庵、幕屋
彼の恐れも、戦いも礼拝の中で解決されていく
本当の強さは、強さから一見かけ離れた所に源を持つ
- 3 結果 v. 5 岩＝救いの確かさ、守りの確かさ
v. 6 頭を高く上げる＝勝利の象徴
- 4 本当の強さは、強さから一見かけ離れた所に源を持つ
cf. ナポレオン 世界制覇に敗れた
(イエスをさして)愛と神の国しか語らなかったこの男は、
今も世界を征服し続けている。

次の4～6節の冒頭の部分には、彼の一つの願いが明らかにされています。それは何でしょうか。

地位でも、名誉でも、権力でもない。われわれが直接的に「力」と考え得るようなものを求めているのではないのです。詩人はこう語ります。「一つのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り、主を仰ぎ望んで喜びを得、その宮で朝を迎えることを。」新共同訳の前の口語訳では、最後の部分を「主の宮に住んで、主の麗しさを見、その宮で尋ねきわめることを」と訳しております。「神の麗しさを見る」などという一見非論理的な、この世の価値では割り切れない感動が存在することを、詩人は語っています。ここで詩人はひとりの礼拝者の姿を見せるのです。4節、5節に見える「主の家、宮、仮庵、幕屋」という言葉は、この礼拝者の魂の奥の間を表現しています。この魂の奥の間に礼拝者としての彼の力の源が隠れているのです。彼の恐れも、戦いも礼拝の中で本質的に解決されていくのです。



本当の強さは強さからは一見かけ離れたところに源を持っているのです。世界制覇に敗れて流刑（島流し）にあったナポレオンが、イ



エスを指して、自らの世界制覇の野望は潰えたが「愛と神の国しか語らなかったこの男は

今も世界を征服し続けている」と語ったと伝えられています。本当の強さは強さからは一見かけ離れたところに源を持っているのです。詩人は、主の宮で、朝の光が大地をおおいつくす夜明けを待つ礼拝者の姿を見せるのです。

つぎの 7 ～ 12 節に目をやると、嘆願表現つまり「…してください

さい」という表現が頻度を増して参ります。7 節「わたしに答えてください。」9 節「僕を退けな

いください。」「わたし離れないでください。」「見捨てないでください。」11 節「あなたの道を示し、平らな道に導いてください。」12 節「敵にわたしを渡さないでください。」悲痛にも聞こえる作者の叫び声が聞こえてきます。彼は勇気を失ったのでしょうか。違います。礼拝者もこの地上を歩まなければならないのです。そしてまたこの地上は楽園ではなく人の叫びの満ちているところでもあります。詩人は10 節に「父母が子を棄てる」という究極的な孤独を語ります。人の最も苦しい、最も大いなる悲しみを語ります。しかし彼は望みを失ったではありません。彼の叫びは、その叫びに答えてくださる方への信頼を前提として発せられているのです。預言者イザヤが語るとおりです。イザヤ書 49 章 15 - 16 節。「49:15 女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも／わたしがあなたを忘れることは決してない。

本論3 一つの望み

- 1 嘆願表現「…してください」
⇒嘆願に応えてくださる方を前提としている
- 2 究極的な孤独
v. 10「父母が私を見捨てる」
＝人の最も苦しい、最大の悲しみ
イザヤ49:15f
- 3 「道」(v. 11)＝歩いていかなければならないもの
礼拝者もこの地上を歩まなければならない
＝人生の旅人、礼拝者⇒巡礼者
- 4 人生は人の叫びが満ちているところ
v. 11 陥れようとする者
v. 12 貪欲な敵、偽りの証人、不法を言い広める者
5. 御顔を求める旅⇄心が萎える
v. 8心よ、主はお前に言われる／「わたしの顔を尋ね求めよ」と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。
人生＝見顔を求める旅
民6:25 主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。

49:16 見よ、わたしはあなたを／
わたしの手のひらに刻みつける。」

11節に「道」とあるように、
礼拝者もまた人生の旅人として、



巡礼者としてこの地上
の道を歩まなければなら
ないのです。そしてこの人生の

道には人生の旅人を「**陥れようとする者**」がおり、また、12節は「**貪欲な敵**」や「**偽りの証人**」や「**不法を言い広める者**」たちの多くの罠が潜んでいるところでもあります。しかし彼は望みを失いません。いくら希望を持ったって人生の「道」の果てには、どうせ「死」が待ち受けている、という人がいるかも知れませんが、しかしわたしたちは望みを失いません。新約時代のわたしたちは、さらに大きな希望を与えられているからです。それは今や、死に打ち勝って甦られた方がわたしたちの希望だからです。

主を勇気の源とし、神を知る

ことを無上の願いとし、主にある望みに巡礼の道を歩む詩人は、最後に、次のように力強く宣言いたします。13、14節。

「私は信じます、
いのちある者の地で
主の恵みを見ることを。
主を待ち望め、
雄々しくあれ、心を強くせよ。
主を待ち望め。」

人の小さな日ごとの生活の中にも、闇が襲ってくることがあります。もう朝が来ないのではないかと思うような闇が襲ってくることもあるかも知れません。しかし、その時でも、詩人が「**主はわが光**」と歌って光の朝に向かって歩んだように、わたしたちもまた、それぞれの人生の光を確認しながら、みずからの足元を一步一步その光に照らされて歩んでいきたいと願います。わたしたちを支える光、わたしたちを導く光とともに、一步一步あゆんでいきたいと思いません。

結論

- 1 水野源三詩集『わが恵み汝に足れり』より
- 2 水野源三氏とその詩(まばたきでつづった詩)
- 3 朗読

最後に、時々ご紹介する水野源三というひとりの詩人の詩を引用

してお話を終わります。この方は、ご存じの方も多いと思いますが、手足、口、耳の機能を赤痢の高熱から併発した脳性麻痺で9歳の時に失います。瞬きはしていますが、体は全く動かなくなっていました。12歳の時、母が置いた聖書を読み始め、やがてクリスチャンになります。18歳ころから自分の思いを詩で表現するようになります。水野源三さんの詩は、五十音表を順番に動く母親の指を眼でおいながら、自分の眼のまばたきで字を拾って創られた詩なのです。お読みします。

「あの悲しみのあの苦しみのただ中を／歩んでくることができたでしょう／もし、私に信仰がなかったら／打ちつけて、打ちつけて、やむことのない嵐の中を／歩んでくることができたでしょう／もし私に信仰がなかったなら／くらき人生の夜を、もし信仰の目がなかったなら／私は、ここまで歩いてくることができたでしょう／神よあなたの豊かな赦しの愛と恵みに感謝します。」

新型コロナウイルスの感染拡大に対する緊急事態宣言の発令中も主はわたしたちの教会の礼拝を護

り続けてくださいました。また新たな1週間も、ウィルスの感染には極力注意しながらも、主を信じて歩んで参りましょう。祈りましょう。

2020.6.14. 日本基督教団千歳丘教会



